

11～12 節には、パウロがエフェソで行った悪霊祓いが記されています。神さまがパウロと共にいて、パウロを用いて奇跡を行ったのです。パウロが癒やされるようにと、手ぬぐいや前掛けを人に渡したとは考えられません。神さまの言葉を語り、奇跡をするパウロに対して、人々がパウロの手ぬぐいや前掛けにでも触れさえすれば、癒されるのでないか、と期待して、それらを病人に触れさせたということではないと思うのです。ここに、12 年間出血が止まらない病に冒されていた女性が後ろからイエスの服の房に触れただけで癒されたという物語が思い起こされます。この時、イエスは「わたしに触れたのはだれか。」と問うているのですから、イエスがこの女性を癒そうと思って癒したのではないということが分かります。著者は、パウロの出来事を、イエスの癒しの出来事と重ねることによって、弟子たちにはイエスの業が継承されている、イエスが弟子たちと共にいて奇跡を起していると告げているのです。それは、パウロがエフェソでイエス・キリストの十字架と復活という福音を宣べ伝えることによって、人々が、病に苦しめられ、悪霊に取りつかれたような生活から癒され、解放された生活を送ることができるようになった、ということです。著者はそのことを示すために、奇跡の出来事を記しているのです。パウロは、主イエスの名を示し、その力を証していたのです。

著述家ヨセフスが記した「ユダヤ古代誌」には、1 世紀にこのような悪霊祓い師がいたことを記されています。ユダヤ人の祈祷師たちのなかには、悪霊に取りつかれている人に、主イエスの名によって「悪霊よ出ていけ」と命じてみる人もいました。この祈祷師たちは、イエスを信じるのではなく、あくまでも自分が主体であり続けながら、イエスの名の力だけを用いて悪霊を追い出そうとしました。しかし、「主イエスの名」そのものに魔術的な力が宿るということではありません。イエス・キリストに自分を委ねる時に、神さまの恵みの力が豊かに働き、人々を悪霊の支配から解放されるのだということが明らかになったのです。すでに洗礼を受け、信者になっていた人々が、彼らが行っていた行為を告白し、魔術を行っていた多く人も魔術の書物を持って来て、皆の前で焼き捨てました。書物を焼き捨てることによってこそ、彼らの信仰は本物となったのです。ここで焼き捨てられたのは本ではなく、一人一人の心の中の魔術を求める思い、自分が主体であり続け、神さまを自分のために利用しようとする、その心がここで焼き捨てられたのです。それを焼き捨てることによって、神さまを信頼し、神さまに委ね、神さまと共に歩む新しい生活を送ることができるようになったのです。